

新病害「ニラえそ条斑病」の防除対策

本県のニラで *Iris Yellow Spot Virus* (IYSV) による新病害「ニラえそ条斑病」の発生が確認されています。県内でのIYSVによる病害は、トルコギキョウ、ねぎ、たまねぎでも発生しています。

ニラえそ条斑病とは？

本病は、*Iris Yellow Spot Virus* (IYSV) の感染によって発生する病気です。本ウイルスは、ネギアザミウマによって媒介され、幼虫の時に感染株を吸汁することで体内にウイルスを獲得し、終生伝搬能力を保持します。経卵伝染、種子伝染、土壌伝染はせず、管理作業等による汁液伝染の可能性は、極めて低いと考えられています。

初期病徴は、葉身に小型の退緑斑を生じ、症状が進むと黄白色の小型のえそ斑点や大型のえそ条斑となります(写真1、2)。

本病の発生時期は、ネギアザミウマの発生が多くなる6月～9月に目立つ傾向があります。

本病の病徴と似ている白斑葉枯病は、ハウス栽培では被覆後から発生し始め、ハウス、トンネル内が多湿条件となる12～4月に発生が多く、露地栽培では4～5月にかけて降雨が続く条件下で多発します。



写真1 退緑斑・えそ条斑

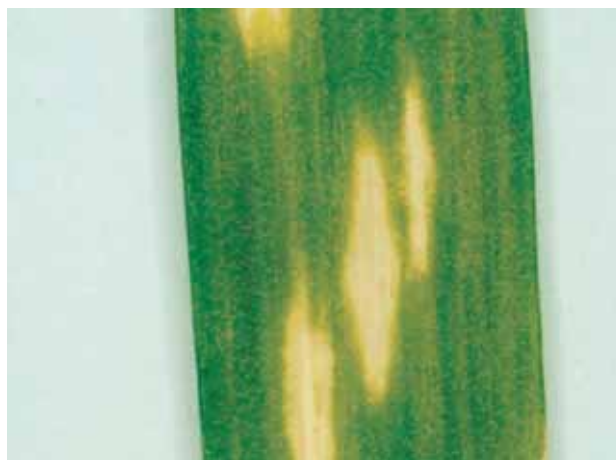


写真2 えそ条斑

ネギアザミウマとは？

- (1) 体長は1.1～1.6mm、体色は黄色～褐色で、一般に夏期は淡色系、冬期は暗色系が多くなります。
- (2) 発育は非常に早く、卵は20℃で20日、25℃で16～17日で成虫になります。雌の生存期間は21～48日で冬期や気温が低いと長くなります。
- (3) 発生の最盛期は6月～9月で、この期間に急激に密度が高まります。
- (4) 成虫はネギ類の地際や草むらに潜んで越冬します。
- (5) 成虫、幼虫が葉の表皮を吸汁するため、食害痕はカスリ状の白斑となります。



写真3 ネギアザミウマによる食害



写真4 ネギアザミウマ成虫 (宇都宮大学提供)

防除対策

- (1) 以上の施設栽培では、施設の外張に紫外線除去フィルムを使用します。また、開口部に白色または銀色の防虫ネット（0.8mm目合以下）を張り施設内への侵入を防ぎます。
- (2) 雑草はネギアザミウマの発生源となるので、ほ場内外の雑草を除去します。
- (3) ビニル被覆をしている施設では収穫終了後に、施設内のネギアザミウマを死滅させるために、蒸し込み処理を行うと効果的です。
- (4) 薬剤によるネギアザミウマの防除を徹底します。

以上のネギアザミウマ及びアザミウマ類に登録のある農薬

系統名	薬剤名	希釈倍率等	使用時期／使用回数	適用害虫
ネオニコチノイド系	アドマイヤー 1 粒剤	4 kg／10 a	定植時／1回	ネギアザミウマ
	モスピラン水溶剤	4,000倍	収穫前日／3回以内	アザミウマ類
	アクタラ顆粒水溶剤	2,000倍	収穫14日前／3回以内	ネギアザミウマ
	ダントツ水溶剤	2,000倍～4,000倍	収穫3日前／3回以内	ネギアザミウマ
合ピレ系	アグロスリン乳剤	2,000倍	収穫7日前／3回以内	ネギアザミウマ
カーバメート系	オンコルマイクロカプセル	2,000倍	収穫21日前／2回以内	ネギアザミウマ
その他	スピノエース顆粒水和剤	10,000倍	収穫前日／3回以内	アザミウマ類

注1) 薬剤抵抗性が発現しやすいのでローテーション散布を行って下さい。

注2) 葉の隙間に生息しているため、ていねいに薬剤散布して下さい。

注3) 農薬はラベルの表示を確認して正しく使用して下さい。

注4) 登録内容は平成20年3月13日現在のものです。

● 本資料に関する問い合わせ先：栃木県農業環境指導センター ●
 TEL 028-626-3086 FAX 028-626-3012